

第47回全国ホタル研究大会報告

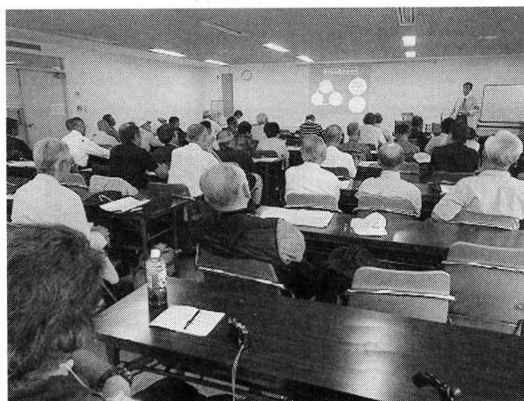
研究大会の概要

全国ホタル研究会の第47回大会が平成26年6月20～22日の3日間、福井県勝山市にて、全国ホタル研究会主催、第47回全国ホタル研究会福井県かつやま大会実行委員会主管、福井県ホタルの会共催、環境省・福井県・福井県教育委員会・勝山市・勝山市教育委員会・福井観光コンベンションビューロー・勝山市エコミュージアム協議会・勝山市ジオパーク推進協議会・NPO法人市民活動ネットワークかつやまHUB・朝日新聞福井総局・産経新聞福井支局・毎日新聞福井支局・読売新聞福井支局・福井新聞社・NHK福井放送局・FBC福井放送・福井テレビの後援で盛大に開催され、全国各地から341名のご参加をいただきました。

【1日目】

13時から勝山市教育会館にて受付が始まり、14時よりオリエンテーションが開催されました。中村会長の挨拶と山下実行委員長長の諸連絡の後、14時30分より同会館内で、第一分科会「ホタルの生態」、第二分科会「ホタルの保全と教育」、第三分科会「ホタルとまちづくり」の3グループに分かれて分科会が行われました。その後、バスで移動し、ホタル観賞会を行う九頭竜川立川地区と浄土寺川芳野地区に向かい、河川環境を下見しました。

観賞会は天気にも恵まれ、絶好のホタル日和でした。九頭竜川立川地区は人の手を加えず、ホタルが自然発生している場所、吉野地区は地域の方々の熱心な保全活動が実を結び、多くのホタルが発生する場所でした。参加者はホタルの飛び交う姿に感動してい



分科会の様子



ホタル観賞会会場の下見

ました。

【2日目】

勝山市民会館にて研究大会が開催されました。

福井県立勝山高等学校日本文化部によるアトラクションのあと、開会式が始まりました。山下実行委員長の開会宣言、中村会長の主催者挨拶に続き、勝山市の山岸市長の歓迎挨拶の後、来賓の祝辞と紹介がなされました。午前は、福井県内の小学生による活動発表があり、午後は、会員による7件の研究発表があり、研究発表会終了後に、第47回総会が開催されました。



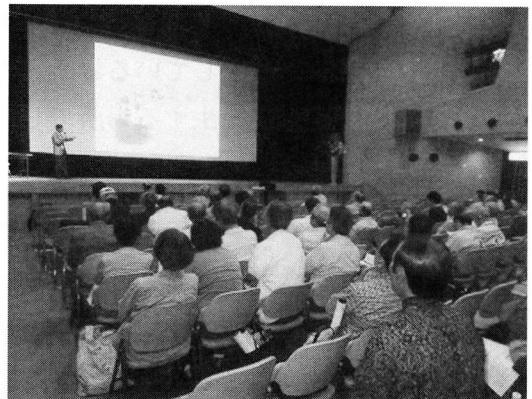
勝山高等学校日本文化部
によるアトラクション



開会式の様子



小学生による活動報告の様子



研究発表の様子

研究大会終了後は、勝山ニューホテルにて、交流懇親会が開催されました。山下実行委員長と山岸市長の挨拶、勝山市議会議員の倉田議長の乾杯により、懇親会は進みました。アトラクションとして芳野左義長クラブによる「勝山左義長ばやし」の演奏があり

ました。次期開催地である静岡県川根本町に大会旗の受け渡しがあり、次期開催地を代表して静岡県川根本町の鈴木敏夫町長の挨拶が行われました。懇親会では、地元の舞踊等のアトラクションを交えつつ、会員や地元大会関係者との親睦を深めました。



芳野左義長クラブによる勝山左義長ばやし
(参加者も演奏に加わりました)



大会旗の受け渡し

【3日目】

希望者による市内観光（福井恐竜博物館）を行い、各自解散となりました。

会 場：福井県勝山市

6月20日（金）：勝山市教育会館

6月21日（土）：勝山市民会館

大会日程：

6月20日（金）

13：00～14：00

受付

14：00～14：30

オリエンテーション

14：30～16：00

分科会 第一分科会「ホタルの生態」
第二分科会「ホタルの保全と教育」
第三分科会「ホタルとまちづくり」

分科会報告

16：00～18：00

ホタル観賞会場所下見

20：00～21：00

ホタル観賞会

浄土寺川芳野地区及び九頭竜立川地区にてホタル観賞

6月21日（土）

- 8 : 30 ~ 9 : 30 受付
- 9 : 30 ~ 9 : 50 アトラクション「地域の伝統祭り披露」
福井県立勝山高等学校日本文化部
- 10 : 00 ~ 10 : 30 第47回全国ホテル研究会福井県かつやま大会開会式
挨拶
山下 征夫 (かつやま大会実行委員長、福井県ホテルの会会長)
中村 光男 (全国ホテル研究会会長)
山岸 正裕 (勝山市長)
来賓紹介・祝辞、祝電披露
- 10 : 45 ~ 11 : 45 小学生による活動報告
- 11 : 45 ~ 12 : 00 講評
- 13 : 00 ~ 16 : 30 研究発表会
- 16 : 30 ~ 17 : 00 第47回全国ホテル研究会総会
- 18 : 00 ~ 21 : 00 交流懇親会 (勝山ニューホテルにて)
- 6月22日 (日)
- 9 : 00 ~ 11 : 30 恐竜博物館エクスカーショ

小学生による活動報告：

- ①環境戦隊！かわだホタルレンジャーの活動報告 ……………
- 鯖江市河和田小学校：(6年生) 竹内 開人、小林 拓馬、定政 冴香、田中 玲奈、
高橋 侑加、井上 樹、木村 拓未、原 大貴、三橋 響己、箕輪 行太郎、(5年
生) 山本 真奈花、原 優太郎、(4年生) 鈴木 綾
- ②狐川にホテルを飛ばそう！ - 私たちのびお Bio ランド - ……………
- 福井市社西小学校：(6年生) 中道 未菜、佐々木 莉菜、植田 佑貴、千葉 駿祐、
平馬 昂輝、川端 文也、湯川 日向、蔵本 日菜
- ③乾側っ子ホテル大好き探検隊 - 田んぼの生きもの調査から - ……………
- 大野市乾側小学校：(6年生) 北山 遥子、杉森 斗志希、辻 克真、吉川 あかり
(5年生)、五十嵐 匠海、石田 咲良、坂本 宗、前川 心美、山本 裕貴、吉田
拓未
- ④未来に贈れますか？勝山の自然 ……………
- 勝山市鹿谷小学校：(6年) 飯田 愛理、宇佐美 太喜、後藤 ゆい、坂井 恋、嶋田
由依、坪内 大和、山内 映和、山口 真利佳、吉田 真優、渡邊 仁、(5年) 石
田 真央、石田 雷生、島田 栄樹、坪内 烈士、中川 大樹、原田 慎太郎、牧野

絃明、吉田 明終

研究発表：

- ①浄土寺川のホタル保護の取り組みについて 松山 信裕
- ②ホタル生息環境の再生と維持管理方法の実践的検討
- 横須賀市長井海の手公園での事例 - 大場 信義
- ③ゲンジボタル成虫の野外での生残率と気候 遊磨 正秀
- ④ゲンジボタルの幼虫の食性について 中 毅士
- ⑤志賀高原石の湯ゲンジボタルの生態 - その4成虫の活動温度 - 三石 暉弥
- ⑥志賀高原・石の湯におけるゲンジボタルの発光パターン 井口 豊
- ⑦遺伝子からみた福井県に生息するヒメボタルの生物多様性 草桶 秀夫

(共同発表の場合は発表者のみ)

分科会報告

第一分科会報告「ホタルの生態」

(参加者26名) 報告：大門 優

河和田地区で観察されたゲンジボタルの写真を観ていただき話題提供とそれらに関する意見交換を行った。内容は系統だってもいなく、学術的なものでもなかったが、興味ある知見が得られた。討議された内容について箇条書きでご報告いたします。

①上陸幼虫のUターン：ホタルの上陸を観察しているとUターンして再び川に戻る個体がすくなくならず観察されるが？

(参加者より) 上陸の距離が長かったり、雨が上がってしまうとホタル幼虫の尾脚が乾いてくる。これが契機となって上陸を中断する行動となる。

②上陸幼虫の再入水について：河和田では発生地点の川に水田用水取水の為の水路が川岸の裾に設置されており、上陸する幼虫は川から上がり、再び用水路に入水したのちにまた、コンクリート壁に取りつかなければならないが再入水について抵抗は無いのだろうか？

(知見なし)

③ホタル激減の真相は？：ホタルがある地点から下流で殆ど発生が無かった。

(提起者推測) 本年は河和田川では大発生の予想がありました。実際、かなり発生しましたが、ある地点から下流は殆ど飛翔が見られませんでした。この地点では橋梁の架け替え工事が行われ、コンクリートの現場打ちが行われていました。また、河川が白濁したとの目撃もあり、生コンが流れた可能性が高いと判断されました。農薬はホタル減少の元凶のように言われているけれど、こうした土木工事の方が影響が非常に大きいと思われる事例でした。

(参加者より) コンクリートのアクは3年くらいは影響がある。

④サナギ化する場所の感知は？：河和田の金谷川の発生地点では約3mの護岸を登りきると、ホタルがサナギ化する土も無い左岸と、サナギ化する土も十分にある右岸があるが、殆どのホタルは見事右岸に集中して登ります。不思議です。

(参加者より) 幼虫は水分(湿り気)に非常に敏感であり、わずかな違いも感じ取っているのではないかと思う。

⑤ホタル合戦は実在する？：ホタル合戦って本当にあるのか？

(滋賀県からの参加者より) 45年くらい前の事であったが見た事がある。数百匹の集団がボールのようにまとまって移動していた。不思議なことに翌日その場所に行ってみると、多くのホタルが死に絶えていた。殆どがオスだったように覚えている。

- ⑥ホタル幼虫の登攀能力は？：ガラス水槽で飼育していたホタル幼虫がいつの間にかいなくなり、後日、水槽の下の台付近に干からびた個体が多数見受けられたが、上陸時期となって、土を求めて脱走した？

(参加者より) ホタル幼虫は登攀能力が低いとされているが、水槽などのガラス面でも短い距離なら登ることは可能である。一般に思われているより登攀能力は高い。

- ⑦ホタルの留年：ホタル幼虫を飼育しているが、12月時点で観察すると成長度合いに大きな差が出ている。殆ど成長していなくて、とても一年でホタルになれない個体もかなりの割合で見受けられるが？

(参加者より) 一年で成虫になれないホタルは珍しくない。実験で飼育していると3年かかって成虫になった記録もある。

- ⑧上陸してもサナギにならないホタル？：飼育槽の土の部分に上がってきた個体を捕獲し、土だけの容器に移した個体の中にサナギ化せず幼虫のままで見られるものが見られた。

(参加者から) 上陸の後、再び水中に戻った個体は、強制的に土中に戻すとサナギ化するものもいるが、サナギ化する率は低いという結果が出ている。

- ⑨豪雨前の不思議な産卵行動：河和田では10年前の7月に福井豪雨で大きな被害を出したが、そのひと月前の産卵調査では通常産卵しないような流木などに多く産卵されていた。異変の前兆だったのであろうか？

(知見なし)

- ⑩ホタルの視力は？：暗闇を樹木の枝葉を避けて飛んだり、とまったりするが視力はどの位あるのだろうか？

(参加者より) 数メートル以内なら殆ど識別できる能力は有しているのではないかと思う。

- ⑪雄雌の比率：ホタルの発生初期はオスメスの比率は5：1くらい、発生終期では比率は1：1くらいになっているように思うが？

(具体的な調査結果無し)

- ⑫ホタルの好む土は？

(参加者から) 土質についての知見は無いが、水分が高い土壌を好む傾向ははっきりしている。

- ⑬エラ呼吸から肺呼吸への転換はいつ？

(参加者から) 上陸後10日目に洪水で上陸場所が約5時間水没したことがあるが、ホタルのサナギは全滅であった。

⑭ヘイケボタルの減少について

(参加者から) ゲンジボタルよりヘイケボタルの方が絶滅が危惧されている。これは水田の冬季の乾田化、用水路の締め切りによる干上がり、街灯の増設の影響が大きい。

⑮ゲンジボタルの生息域について

(参加者より) ゲンジボタルは流水域で棲息すると思われるが、止水域や溜まり水状態の湿地でもかなりの棲息が見られている場所がある。

⑯砂防ダムの影響について

(参加者より) 砂防ダムの建設増加で、湖底に溜まった落ち葉がヘドロ化し、カワニナの餌として利用できなくなることと、発生するメタンガスの影響を受けカワニナが減少している。結果、ゲンジボタルの減少の引き金となっている。

⑰ホタルの大発生について

(参加者より) 近年、ゲンジボタルが大発生している例が鳥取県にある。ここの上流部には牧場がある。県内の他にもこうした傾向がみられることから、野積みされている畜糞から浸み出る養分がホタルの大発生に関連していると思われる。昔の有畜農業がホタルの発生に適合していたのではないか。

以上が主な疑問点と意見でした。身近に観察しているホタルですが、次々と疑問が湧いてきます。参加者は熱心な人も多く、初めて知ることや、認識を新たにすることも多々あり有意義な時間でした。

第2分科会 保全と教育

司会 草桶 秀夫、書記 上坂 鈴子

初めに、草桶秀夫先生から「保全と教育」について話され。その後①どの様な環境保全②どの様な環境教育に取り組んでいるのかについて討論が行われた。

草桶先生は人間のかかわりについて、①社会(人間関係)②経済③自然を挙げ、社会や経済(金銭)はすべて円滑に幸せになるとは限らないが、自然は癒し心地よい関係である。ホタルとの関わりにより①自然保護②環境保全(人が壊してきたものを取り戻す)③環境教育がある。更にホタル観察会等の町おこし活動による経済的効果が生まれ、人との出会い心の触れ合いが構築される。

発足10年目の福井県ホタルの会の「保全と教育」の取り組みについて、「保全」では今回ホタル観察会場である町の真ん中を流れる浄土寺川のホタルを守る会と中部中学

生の清掃活動＝環境保全を毎年実施。「教育」では①環境サミット＝福井県ホタルの会が主催し2013年3回目のサミットが行われ5校の小学生達がホタルの環境活動について発表②紙芝居＝河和田自然に親しむ会が中心となって制作した「ホタル物語」③人工飼育＝社西ホタルの会の地域ボランティア・児童・PTAが一体となって学校ビオトープを造成し人工飼育しホタルの観察を行っている。

ホタルとは歴史的文化、日本人が引き継いできた自然崇拜、自他の精神（他を思いやる）、生物と人間の連続的な結び付きがあり、ホタルに対しても命を大切に作る心が流れている。日本人にとってホタルは特異教育の象徴な生き物ではないか。今、日本人に求められていることは自然に親しみ健全な道徳精神を培うこと。それは「あっ、光ってる、きれい！」の感動であり、環境保全であり、環境教育である。

討論①環境保全②環境教育について

水野氏（石川県）：ホタルについてアピールしていますが、川の新設等で川はきれいになったがホタルは一匹もいなくなった。なぜ相談してくれなかったと話した。最近河川課から相談を受けアドバイスも求められるようになり、地道な活動を続けてきたことで市民、行政に理解されるようになった。

水上氏（富山県）：44年前きれいなホタルに打たれ今日まで見つめている変なおじさんです。今一番悩んでいるのはどんな指導者が望ましいか？ 指導者によって活動が変わる。指導者は心温かく、専門的知識と経験を持ち、自分自身の利害を超えた人と思う。しかし、きれいな環境を作ろうと思う活動は殆んどボランティア、みんなと一緒にやり引っ張っていく指導者は大変な苦勞がある。どういった事を魅力にして環境保全・環境教育を進めていったらよいか今まさに迷っている。

森氏（富山県）：用水はコンクリートで道路はアスファルトと生物が残る草ボウボウ、どちらが環境保全か？人工的なビオトープが環境教育か？迷っている。

山下氏（富山県）：9年前からホタルが沢山出、地域の人たちは子ども達の為に繋いでいこうと6月の下草刈りは遅らせ、7月ホタルが出なくなってから地域一斉に行う。こうした活動なくしてはたの一生は無い。又、ホタルの飼育、観察を通して環境教育に取り組み、ホタルの匂いを感じる子供たちの為、ホタルの数にこだわらず継続して行きたい。

米澤氏（鳥取県）：第40回全国大会には4千匹のホタルが出た、環境異変の大雨で現在は180匹、市民達からホタル再現の要望があるが果たして数の追及がいいのか迷っている。

落合氏（静岡県）：本当にホタルを愛しているのか疑問に思う。ビオトープを作ればホタルが見られる。人間の欲と自然環境保護の関わりに疑問を持っている。

山崎氏（福井県）：川がコンクリートになり、ビオトープで対応したがホタルがいな

くなった。田舎に住んでいるがホタルがいない。どこかに自然を残し少しずつ努力してホタルを増やしたい。

岡田氏（富山県）：子供の頃ホタルは沢山いた。ある時突然いなくなった。農薬だった。河川は基盤整理で三方コンクリートになった。ところが十数年前発生し自然の再生に驚いた。理由は自然にやさしい農薬になり、コンクリートの川には土がたまり藻が生え草が生えた、家庭からの汚水は流さないようにしてきたから。草は刈ってもいいが農薬、除草剤は使わない。破壊は一瞬だが再生には年月がかかる。

中村氏（北九州）：環境保全について、北九州ホタルの会と行政（建設省のホタル係）が問題点を出し話し合いを進めて今日に至っています。建設省は河川にすべて関わっている。他県ではホタルの会と行政の観光係との連携で進めていると思います。

大場氏（神奈川県）：今回のキーワードとして①感動する、子供の為にも大人も感動。②ホタルの不思議が大きな原動力になる、子供の環境教育の取り組みにはこの不思議をどう伝え紐とくか。教育者の問題でどう指導者を育成するか。出来るだけこのような場を作り共有する。③間口を広くする。ホタルが住む環境の配下にはいろんな生物（トンボ・イモリ・サンショウウオ等）がいるので、そこから目を向けながらホタルや地域遺産に繋げる。④バランス（森羅万象）感覚が都会において無くなっている。それが復活しなければ子供たちにバランス感覚を育てられない。地元の小中学校で月2回「蛍の里作り」の活動を8年程している（地域連携）。しかし、学校で継続するのは困難で課題です。⑤ビオトープの差別化、目的をはっきりする。活動の目標を知らせ共有する。

高田氏（愛知県）：濃尾平野が実家ですが40年前と全く違う。川がなく用水路に水がない。他はどうなっているのかな？

平沼氏（北海道）：北海道にはヘイケボタルしかいなかったが、最近ゲンジボタルがいる。外来種の問題があり勉強中。環境面は農薬も少なくなっていて今まで見ない昆虫もいる。後、後継者の取り込みをどうするか悩んでいる。

第3分科会 ホタルとまちづくり

進行 松田 元栄（福井県）、記録 八木 千才（福井県）

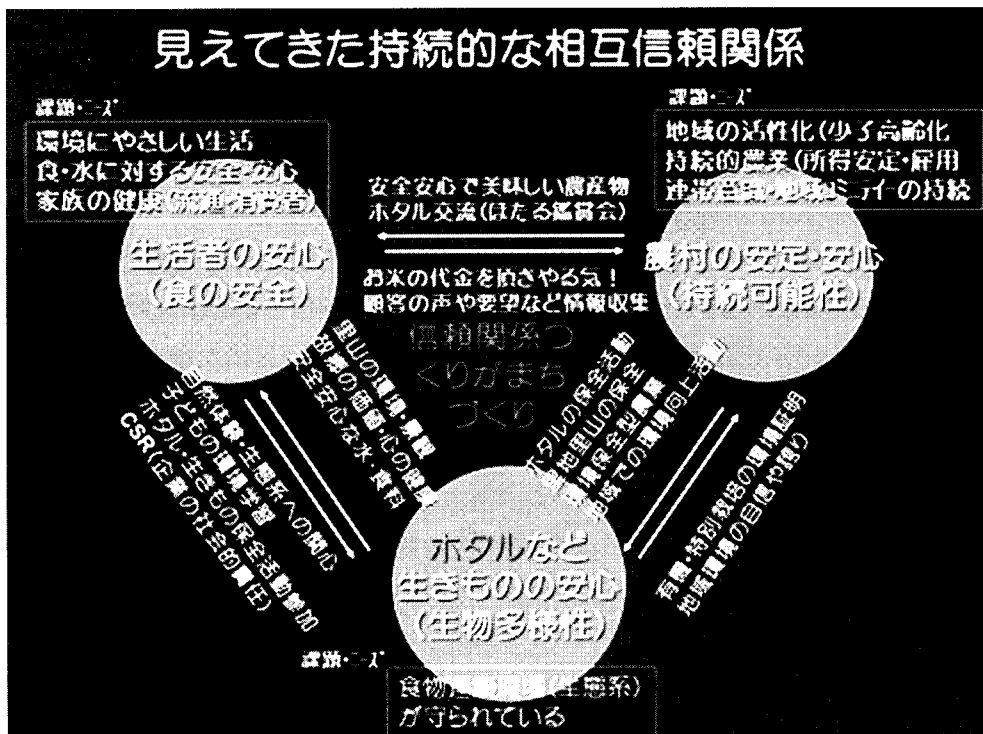
1) 事例報告：松田元栄（福井県大野市丁（ようろ））

少子高齢化と農業の担い手不足により、農村の地域コミュニティ維持が難しくなっている。生きものは、化学肥料と農薬優先の農業経営の弊害により、生活域が狭くなり厳しい環境にある。生活者（消費者）にとって、環境や身体にやさしい生活と食に対する安全が大きな関心事であろう。

一例を挙げると、「ほたる観賞会」の会場で、ホタルが住み、農薬と化学肥料を極力

抑えた環境で栽培した野菜や米とおかき等の製品を販売したところ、来客に大変喜ばれた。また、管理された里山のすばらしさは、そこに生活する者に心の健康と故郷への価値を見いだすきっかけを与える。

農家はホタルの保全活動や環境保全型農業の実践により、農業と生きものとの共生関係を創ることができる。また、子ども達といっしょに環境学習に参加し考えることはとても重要である。消費者にとっては、ホタルが生息していることが、農産物が環境に良いところで栽培されている事の証として受け入れられ、経済的効果が期待できる。さらに、企業では、社会的責任として生物多様性の保全に貢献してくれるようになった。このように、農村の安定・安心（持続可能性）、生活者の安心（食の安心）、ホタルなど生きものの安心（生物多様性）の三者が、相互のニーズを満たしながら信頼関係を構築していくことで、地域の活力UPと元気なコミュニティを創ることにつながる。



2) 質疑応答など

提案1. 富山市 佐々木長寿 氏

環境汚染物質に強い身体をつくるために玄米菜食に努めるとよい。

Q1. 愛知県 原田竹二 氏

ジャンボタニシや鳥類がホタルの幼虫を食べてしまう。何か方策はあるか。

A 1. 回答無し

Q 2. 鳥取県 井塚照雄 氏

人出が多くなり、ホテルが散ってしまう。駐車場も混雑する。対処法は？

A 2. 滋賀県 北田俊夫 氏

守山市では2003年にゲンジボタルが大量発生し、車が増えて市内が混雑した。翌年に検討した結果、市民グラウンドに駐車してもらい、バスで案内する「パーク&ライド」を実施した。4回目には車ではなく電車を利用してもらい、駅からバスで案内する「パーク&ウオーク」に変更した。19時から22時までの間に15分間隔でバスを出している。車の混雑はかなり解消されたが、土曜日の人出は多く大変である。

A 2. 松田

大野市丁の場合、ショッピングセンターの協賛で、その駐車場からシャトルバスを出す。17時30分から20時30分までの間で4～5往復する。今年で3回目だが、利用者が増えてきた。

Q 3. 鳥取県 近藤仁志 氏

ホテルを利用した経済活動の事例は？

A 3. 松田

大野市丁の場合、地元（松田氏）から製菓業者へ提案し、商品名「ホテルのみのり」という「おかき」を販売している。ホテルが舞う田んぼで特別栽培した餅米（カグラモチ）を原料にした「おかき」ということで、商品名と売り込み方法にホテルと環境を結びつけた。企業も新商品を模索していた。

Q 4. 富山県 齊藤和夫 氏

川底を浚渫する場合、ホテル保護への配慮はあるか？ 今のところ発生率にあまり影響ないようだが。

A 4. 松田

川の両面はコンクリートで底は土のまま、土砂上げはほとんどやらない。水は枯れない。ホテルの数に影響ない。

Q 5. 松田

まちづくりへのホテル活用は？

A 5. 福井県 高橋 甫 氏

20年前に過疎化対策として、過去にホテルが飛んでいた川に幼虫とカワニナを放流

することを始めた。10年後ぐらいから少し飛び出した。川床整備は幼虫が上陸後に行い、ほとんど影響はない。観賞会を始める前に、地元で栽培したもち米を使った餅つきや、福井県産の大麦が原料のそうめん、流しそうめんを行っている。

・松田 イベントを通した町づくりは人を集めることにつながる、ホームページなどネットの活用で情報発信し地域を知ってもらう。

ホテルに関する商品開発で客にアピールできる、事例はあるか。

・発言者不明

ホテル提灯を30基制作する。子どもが絵を描き、大人は俳句を作って書く。道案内を兼ねて点灯する。

・鳥取県 井塚照雄 氏

マスコミが取り上げれば地区外から人が来て、ホテルを見て感激する。地元住民がその声を聞くことで喜びを感じる。子や孫も帰ってくるようになった。ホテルは自然に出るので、経済効果を目的にするというより、住民が地域に誇りを持って生活していければいいと思っている。そういう意味では、他人からの評価を得ることは大事。

・松田 ホテル観賞会などのイベントを通して地域が元気になるためには、住民が役割を担って関わり、おもてなしすることが大事。

大会開催地より

第47回全国ホテル研究会 福井県かつやま大会を終えて

大会実行委員長 山下 征夫*

「夜の川面を飛び交うホテルは、初夏の風物詩ともなっており、人々の心をひきつけてきました。」これは、福井県ホテルの会入会案内の一節です。当会はホテルの棲む自然環境を保全、復元し未来に残すべきと啓蒙活動を行い、人づくり、まちづくりをも目指しています。

平成26年に会発足10年目を迎えるにあたり、全国ホテル研究会が毎年開催している「全国ホテル研究大会」を是非、福井県へ招致しようとしたのは平成23年4月でした。ほどなく本部より平成26年度に福井県で初めての開催を承諾していただいた。まず、手始めに過去の開催状況の資料を関係者のご厚意に甘え入手出来た。それらを参考に福井県大会の予算をたてた。今になって考えると資金ゼロでよく開催を決断したものだと思う。収入源は賛助者による広告依頼に頼らざるを得ないのか！当初はまだまだ実施が先という呑気さからか、思うように資金が集まらなく、気の重い

日が続いた。そのうち「(公財)福井観光コンベンションビューロー」の大会開催助成金制度を知り早速応募した。やがて、その内諾を得た。それと本部からの主催者大会負担金と合わせて大きな支えとなった。気持ちの余裕も少し出た。賛助広告者も県ホテルの会々員の奔走で理解者も増え順調に推移した。

大会開催は平成26年6月20日(金)～22日(日)の3日間、開催地は自然環境豊かな勝山市。全国から南は沖縄(1人香港)から、北は北海道までホテル愛好者、研究者を主体とした方々が最高で340余名の来場者が有り。自然環境指標昆虫のホテルに関する世界的にも著名な研究者の発表、活動報告、未来への提言等、一般入場者にとって普段経験の無い貴重なホテルに関する情報を聴衆出来たことに感動した方も多々おられたように思う。特に今回の大会では福井県下4校の小学校児童による環境活動発表の場を設け、児童が良い経験をし、又未来への継続が出来るであろう希望が持てたように思う。

大会初日の分科会は「ホテルの生態」「ホテルの保全と教育」「ホテルとまちづくり」の3部門に分かれ、それぞれ各部60余名の構成で話し合いが持たれ、時間が不足するくらいの活気ある質疑応答が行われた。夜のホテル観察会は絶好の観察日和に恵まれ、1か所目の浄土寺川芳野地区周辺は河川災害対策工事により絶滅しかけたホテルが官民協力の保全活動で見事復元した場所で、市街地を流れ、ホテル発生時は川周辺の家は照明を消灯、減灯し守っている場所です。2か所目は九頭竜川立川地区周辺で郊外の手付かずの自然に乱舞するホテルを観察した。丁度ピーク時期で勝山市のホテルが最高に堪能出来たと思う。その日は市内某小学校のホテル研究観察会と重なり静寂な雰囲気での観察では無かったのが少し残念だった。

大会2日目の開会式前のアトラクションで地元勝山高校日本文化部総勢30余名による「地域の伝統祭り太鼓」は福井県に居ても鑑賞する機会が少なく滲み出る活気に圧倒され、これからの未来を担う若者の逞しさを感じた。夜の懇親会では地元料理を主体に、勝山おろしそば、地酒等で懇談し、アトラクションで地元の保存会による「勝山左義長まつり」を披露した。ころ合いに次回全国大会開催地の静岡県川根本町様へ無事大会旗を渡した時、ホツと肩の荷が下りたような気がした。

3日目は希望者対象の近隣観光で福井県が観光の目玉として全国に広報している「福井県立恐竜博物館」の見学。勝山市内で距離的に近く午前中で全国大会の幕を閉じた。

大会は3日間共好天に恵まれ、準備した関係者にとって誰もが操作出来ない最高のご褒美であった。

末尾になりましたが、会場借用、大会全体に便宜いただきました勝山市、何かとバックアップいただきました福井県、大会助成いただきました(公財)福井観光コ

ンペンションビューロー、全国ホテル研究会、賛助広告者の皆さま、全国各地から来福された参加者の皆さま、大会準備に奔走された県ホテルの会々員と関係各位に感謝申し上げます。有難う御座いました。 (*福井県ホテルの会会長)

大会発表者より

勝山市鹿谷小学校11名の子どもたちから大会参加の感想をいただきました。

6年 坪内 大和

ホテルサミットの前、練習をしました。なかなか覚えられませんでした。でも、だんだん覚えられるようになりました。

ホテルサミット当日になりました。4校来ていました。おもしろかったのがピオピオランドでした。いろんな所があってそれに名前をつけていました。タンク兄弟が特におもしろかったです。

鹿谷小学校の番になりました。最初はきんちょうしたけどだんだん楽しくなりました。

6年 山内 映和

全国ホテル研究会がありました。1番目は鯖江市河和田小学校でした。「かわだレンジャー」として川柳も発表していたのですごいなあと思いました。2番目の福井市社西小学校は学校のピオトープに名前をつけて、狐川にほたるを飛ばしたくてがんばっていることがよくわかりました。3番目の大野市乾側小学校の人たちも私が知らないホテルのことなどを発表していました。

最後は私たち鹿谷小学校。私たちの発表を聞いて笑ってくれた人たちもいたので、とてもホッとしました。発表が終わると「がんばったね。」「よかったよ。」と言ってくれた人がいたのでとてもうれしかったです。

6年 山口 真利佳

私たちの発表は4番目で、最後でした。私は、他の学校の発表を聞いて、ホテルの幼虫を見たのは他の学校も一緒だなあと思いました。鹿谷小学校の番がきました。私はとてもきんちょうして、ゆっくりはっきり言えるかどうか心配でした。でも落ち着いて発表することができました。鹿谷小学校は劇やクイズが入っていたので、みんな笑って発表を見ていたので良かったです。私たちはおもしろく伝えられたので良かったと思いました。発表が成功して良かったです。

6年 吉田 真優

本番の時は、半日奉仕の後に発表したときより大きな声で言うことができました。紙を見ずに、しっかりと覚えて言うことができました。発表する場所はとても広くてたくさんのお客さんがいてきんちょうしました。自分が劇をするとき大きな声で言うことができたので良かったです。他の学校は約10年かけて地域の人も協力して池などを作ってくれました。

今日来たお客さんが、少しでも生き物一杯の勝山にするために協力してくれるといいなあと思いました。お客さんにぼくたちの気持ちが伝わればいいなあと思いました。

6年 渡邊 仁

最初の学校は河和田小学校で、ホタレンジャーというのがとてもおもしろいと思いました。どの学校もしていることが似ていると思いました。他の学校にビオトープがあつて名前がついていておもしろいと想いました。しかも広くていいなあと思いました。

ぼくたちの本番が始まりました。リハーサルで最後のセリフを間違えたので大丈夫かなあと思いました。みんなたくさん笑ってくれて良かったです。達成感がありました。

5年 中川 大樹

ホタルサミットではぼくのせりふで会場の大人が笑ってくれたり、拍手をしたり反応をしてくれたのでとてもうれしかったです。発表が終わってから、ネジアートのホタルや折り紙のホタルをもらってとてもうれしかったです。

5年 島田 栄樹

ホタルサミットでは、他の学校の発表などを聞いてホタルのことがよくわかりました。他の学校の発表を聞くこともとても楽しかったです。自分たちが調べてきたことをみんなの前で発表できたことがとてもうれしかったです。

5年 坪内 烈士

他の学校の発表で「ホタレンジャー」の発表がとても心に残っています。他のどの学校もホタルについてしっかり調べてありすごいなと思いました。

5年 牧野 紘明

発表のために、たくさん練習をしてファイルを見ないで言うことができました。みんなで発表を成功させることができとてもうれしかったです。最後に感謝状ももらえてとてもうれしかったです。

5年 石田 雷生

ぼくは、他の学校の発表を聞いていて、社西小学校のビオトープはザリガニやメダカがいて、とても広いビオトープなのでいいなと思いました。ぼくたちの発表は、聞いている人が笑ってくれたり、拍手をしてくれたりしました。ぼくたちは提案したいことを劇にして伝えました。劇ではみんなが笑顔で聞いていてくれるのがわかったのでうれしかったです。

5年 吉田 明柊

発表をする前は緊張していたけど、ステージに上がると案外緊張しませんでした。ぼくたちは発表の中に少し劇を入れました。僕はLEDライトの役をしました。みんな楽しく発表できたのでよかったです。